

発 刊 に よ せ て

今年は、ことのほか厳しい猛暑日の続く中、研究レポート作成当事者は勿論、紀要作成に直接関わった研修委員も大汗を流しながら、やっと発刊まで漕ぎつけ、研究紀要第 20 号として無事に仕上げる事が出来ました。

2年に一回ずつまとめ上げての発刊が 20 号になったということは、職員の研究への取り組みが 40 年間も継続してきたこととなります。愛護会が、福祉事業の基本方針としてそれぞれの事業部会に掲げ進めてきた研究と実践を、それぞれの部会が課題を持ち、それを職員一人ひとりが自らの課題として日々の実践の中で解決の方法を探るために研修を積み重ね、まとめ上げ続けてまいりました。その活動が基本方針に沿ったより充実した実践へと繋がってきているところです。この創立より一貫して続けられてきている研究と実践の在り方は、職員一人ひとりの力量を確実に高め、自信と誇りを持ち、子供たちの健やかな成長と利用者のニーズに応えながらのよりよい保育者、支援者として歩み続けてきているところです。このことは、愛護会の他に誇れる大きな財産であると受け止めております。

今年の研究紀要に載せられたレポートの中には、調理員としての立場から課題へ取り組んだ希望の園(現興郷塾)千葉さんのレポートがあります。彼は、残食を記録しながら一人ひとりの体調や好みを把握し、調理員として出来る支援について考え、工夫し実践しています。利用者にしっかりと寄り添いながら前向きに取り組み、地道な実践を続けてきている様子を窺い知ることが出来ます。愛護会の職員となったからには、誰もがそれぞれの立場で、課題を持ち、日々研鑽を積み重ねながら実践していく、それが当たり前という体質になってきていること、積み重ねられてきた歴史の大きさ、意義を改めて感じさせられます。

本年度から長寿福祉事業の研究と実践もスタートし、新たな課題も出てまいります。今、愛護会の職員に求められているのは、更なる資質の向上を目指していくことです。今までの実践を誇りにしながら、意欲的に学ぶ姿勢を持ち、前向きに課題に取り組み、実践して行ってほしいと思います。研究の要としての愛育研究所の役割が、ますます重要性を増してきていることを実感しながら、職員研修をサポートしてまいりたいと考えております。

最後になりましたが、レポートを提供いただきました職員の皆様と関係各位に心より御礼申し上げ、簡単ですが、発刊にあたっての挨拶といたします。

愛 育 研 究 所
所 長 及 川 紀 美 子